Heroldo de HEL

N-ro 46　aprilo 1993

ORGANO DE
HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO

北海道エスペラント連盟
062　札幌市豊平区旭町４丁目１番４０号
北海学園大学　切替英雄 気付
HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO
Kirikae-Hideo, Hokkaigakuen Daigaku,
Asahimachi 4－1－40 Tojohira-ku,
Sapporo-shi, 062, Japanio

ENHAVO

読書ノートから　El mia legado　2

北海道エスペラント合宿へのお誘い
Invito al kunloĝado de esperantistoj en hokkajdo　3

ドイツエスペラント協会決議(I Fから須藤訳)
Rezolucio de Germana Esperanto-Asocio
(El INTERNACIA FERVOJISTO 1993. 1
traduko　s-ro Sudoo)　4

小樽のPIONIRO 萩原謙造について
HAGIHARA Kenzoo, nia Pioniro en Otaru　6

エスペラント講習会へのお誘い
Invito al Esperanta kurso en Sapporo　7

アイヌ新法試訳(２)
Propono por LA LEGO PRI LA AINA NACIO(2)　8

エロシェンコ「枯葉物語」より
El Rakontoj de Velkinta Folio deErosenko　9

カワハラ・カズヤへ手紙を！
Sendu leterojn al s-ano Kaŭahara !　13

カワハラ・カズヤ氏からの便り
El raporto de s-ro Kaŭahara
Iom pri mia "RAPORTO"　14
Vana duoblrco　15
Averto　15

会費納入のお願い　Bonvolu pagi kotizon　16

近況報告　静岡の大原たかし氏，女満別の小川己久雄氏，札幌の砂野裕子さん
Novaĵo de s-ro Oohara ,kaj s-ro Ogaua ,
kaj f-ino Isano　16

編集部から，お願いとお詫び

Peto kaj pardonpeto
el redaktejo

1992 aprilo－oktobro は，N-ro 43となるべきところ，N-ro 42 が編集者のミスで２回発行されてしまいました。

1992 novembro－decembro は，N-ro 44が，前号の1993 januaro－marto(matoとなっているのでrを加えて下さい)は，N-ro 45となるのが正しいので，今回発行を，N-ro 46とさせていただきます。

前号訂正

ENHAVO

…kiuj logas……4 ⇒ …kiuj loĝas……4
…Doi-Hirokazu……La Premion Osaka　11 ⇒
…Doi-Hirokaz……La Premion Ossaka　11
…redakino　13 ⇒ …redaktinto　13
…　Nekrogo　15 ⇒ …　Nekrologo　15
…s-ro Iuai　16 ⇒ …s-ro Iŭai　16

編集者としてできるだけ誤りのないよう努力いたしますが，今後とも，記事の誤りに気がついたときは，お知らせ下さい。

２頁のs-ro Sudooの原稿は，以前に受け取っておりましたが，編集者交代等の不手際で掲載が遅れたことをお詫びいたします。

なお，1992 aprilo－oktobro N-ro 43 11頁に掲載のFacila esperantoについては，編集者のミスで誤記が多かったため訂正したものを次号掲載の予定です。

(阿部映子 Eiko Abe)

読書ノートから

須藤　昭三

Nesenditaj leteroj El Japanio
Spomenka Stimec 著
（福岡，1990年刊，65p.　500円）

ご存知と思うが著者は札幌で開催された第75回日本エスペラント大会（1988年）に参加して大会大学で講義をしている。これはその折の旅行記である。この本がスウェーデンで訳されていると知ると、外国人を客にする場合、われわれの態度も気が抜けないなと思う。

例えば彼女（著者）が広島へ行き８月６日の式典に出席し平和行進に参加するのだが、その帰途ある家の窓にヒットラーの旗が広げられているのを見て顔が青ざめるのである。広島の“平和の日”に私が見たものを彼女は見ただろうか？　と同行の知人に目をやると、“窓に何を置いているのかその人自身で分っていないのよ”とそらしてしまった。“誰をこの人は弁護しているのだろうか？”と考え込んでしまう。ユーゴは第２次大戦でドイツに占領されていた国である。これを読んで私は、この人たちは未だあの逆卍を見ると“身の毛がよだつ”のだろうと考えた。今も世界で“日の丸”を見て同じような思いをする人たちがいない、といえようか？

もう一つは、平和都市広島が朝鮮人被爆者の慰霊碑で差別をしているということである（彼女が広島を訪れた1988年の時点で）。この外国人は事実を見てはっきりと広島市に抗議している。この本で最も印象づけられた部分であった。

乗物の中でよく眠る日本人、吊り革にぶら下がりながらでも上手に眠っている。しかし彼らの仕事のリズムを知ると驚くに当たらないという。そんな彼女に“過労死”など話したら頭痛がなおさら治らなくなるだろう――というのは連日の睡眠不足で不思議な頭痛が身についてしまったそうである。日夜自分をとりまく幾百万の人たちの騒音が波となって押し寄せてくる。車掌のアナウンスに聞耳を立てる、夜は“蕎麦殻”の枕が耳元でさらさらと音を立てる――とまあこんな次第で、でも北海道からの帰途、水面下 140㍍の底を通過したときは朝５時まで気がつかなかったそうである。日本縦断5000㌔。計算するとおよそその位になる。東京－博多ĉ.1200㌔、博多－青森ĉ.2050㌔、青森－札幌ĉ. 440㌔、札幌－東京ĉ.1280㌔。ただし往路東京－札幌は飛行機だが。

読んでいて私が欲しいものがあった。ヨーロッパ発行の世界地図だ。彼女によると菊島和子さん宅には用意されているという。われわれが見る世界地図は日本製なので真ん中に日本が位置しているが、向こうのには日本が端にあるという。それを見ていると自分がヨーロッパにいる気分になるだろう。

ところで彼女の北海道の印象はどうだろう。最初にページを飛ばして読んだ部分だが、これは自分で読んでください。

著者のお国のユーゴスラビアは現在大変なことになっているが彼女はどうしているだろうか。

彼女のきつい一言“Toleremo ne estas ĉiam facile aplikebla.”　スイカ割りを誰でもすると思ったら大間違いだってさ。

1991.12.04　（室蘭エスペラント会）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この本のおかげで、札幌市はサントリービールの生産で有名、と世界中に知れわたった。そういえば、サントリーにおつとめするエスペランチストがいたような……。　（元編）

北海道エスペラント合宿へのお誘い

INVITO AL KUNLOĜADO DE ESPERANTISTOJ EN HOKKAJDO

北海道のエスペランチストの皆様

５月１４日（金）午後５時から１６日（日）午後（４時）のあいだ、岩見沢の法然寺で私たちのエスペラント合宿が行なわれます。

私たちが一堂に会する機会は、初秋に行なわれる北海道大会を除いて、この合宿しかありません。合宿は、北海道のエスペランチストが泊がけでエスペラントを楽しむ集いです。是非いらしてください。

今年は、「エスペラントの言語的伝統」を守る三ツ石清氏を講師としてお招きしております。ザメンホフの筆遣いが伝わってくるようなお話がうかがえると想像しております。

初級の方には、楽しい教材（Liza kaj Paulo）を用いた講習を予定しております。講師は、児玉広夫、星田淳、切替英雄です。

ご参加をお知らせ下さる葉書がまだお手元におありの方は、お急ぎお送りください。

Karaj Esperantistoj en Hokkajdo,

Ni okazigos la Kunloĝadon de Esperantistoj en Hokkajdo de 14a Majo (Vendredo, 5:00 pm) ĝis 16a Majo (Dimanco, 4:00 pm) en Hoonenĝi, Iŭamizawa.

Ni havas nur du ŝancojn en unu jaro por renkontiĝi; unu estas la printempa Kunloĝado kaj la alia estas la aŭtuna Kongreso. Kunloĝado estas kunveno, en kiu Esperantistoj en Hokkajdo ĝojas Esperanton kunloĝante kelkajn tagojn.

Ĉi-jaran ŝancon ni invitis s-ron Micuisi-Kijoŝi en Nagoja kiel la gastogvidanton. Li estas grava persono en nia mondo. Lia aserto, ke observu la lingvan tradicion de Esperanto, estas aŭskultinda. Ni imagas, ke nin kulturigos liaj karaj paroloj, kiuj sentigos nin kvazaŭ stari apud Zamenhof en la verkado.

Por komencantoj ni preparas kurson, en kiu ni lernu per gaja lernolibro Liza kaj Paŭlo. Gvidantoj estos Kodama-Hiroo, Hoŝida-Acuŝi kaj Kirikae-Hideo.

Se vi tenas poŝtkarton en la mano ankoraŭ, kiu sciigos vian aleston al la kunloĝado, bonvolu tuj sendi al ni.

ＨＥＬ事務局　切替英雄
Sekretario　Kirikae-Hideo

Rezolucio de Germana Esperanto-Asocio

okaze de la kontraŭeksterlandanaj atakoj dum la lastaj monatoj en Germanio

Germana Esperanto-Asocio, kiel reprezentanto de civitana kaj kultura movado aktivanta de pli ol 100 jaroj por kompreno kaj paco inter homoj de malsamaj naciecoj, eksterordinare indignas pri la aktuala ondo de perforto kontraŭ eksterlandanoj en Germanio. Kun abomeno kaj hororo ni vidas, ke ŝovinismo kaj rasismo en blinde furioza malamo disvastiĝas pli kaj pli en Germanio kaj danĝerigas nian demokration. Kiu hodiaŭ silente rigardas, kiam oni batas fremdulojn, morgaŭ devos rigardi, kiel oni bruligas librojn kaj kiel postmorgaŭ oni murdos tutajn grupojn el la popolo. La pretendo, ke Germanio "ne estas lando malamika al eksterlandanoj", fariĝas nuda ciniko.

Germana Esperanto-Asocio tial postulas:

- efikan protekton kontraŭ atakoj al korpo kaj vivo de homoj, kaj energian agadon de polico kaj justico kontraŭ la obstinaj perfortuloj;

- ampleksan dialogon inter socio kaj politiko sur ĉiuj niveloj, por venki la estiĝintan fremdiĝon kaj por serĉi eventualajn solvojn por la realaj problemoj kun konsidero de ties kaŭzoj;

- solidaran kaj aktivan pledon de ĉiuj demokratoj en "reto da solidareco" kontraŭ la terorismo de la politikaj dekstruloj, per tio ke pli ol ĝis nun ni faru la valorojn de demokratio, libero kaj homaj rajtoj bazo de nia identiĝo kun nia respubliko, tiamaniere malfortigante la naciisman elementon. Kiu nomas sin germano, devas aktive pledi por tiuj valoroj, pri kiuj ni devus fieri de 40 jaroj. Ĉiu, kiu tiel piedpremas niajn valorojn, metas sin kontraŭ nia socio kaj devas porti la konsekvencojn antaŭvideblajn en konstitucie jura ŝtato.

Al niaj samlandanoj kaj al niaj amikoj en la tuta mondo ni diras: Tion ĉi ni ne toleras! Ne eblas senkulpigi tiajn fiagojn. Ni apelacias al niaj membroj kaj al ĉiuj Esperanto-amikoj, ke ili kun ankoraŭ pli da civila kuraĝo ol ĝis nun aktivu por la protekto de homoj senkulpe minacataj.

En Mainz, la 4an de oktobro 1992 - la estraro de Germana Esperanto-Asocio

ドイツエスペラント協会決議

－ドイツにおける最近の反外国人攻撃にあたって－

ドイツエスペラント協会は、異なる人間間の理解と平和のために１００年以上も以前から市民的、文化的、積極的な活動の代表者としてドイツにおける外国人に対する暴力の現在の高まりについて極めて憤慨している。いやらしさと、名誉をもって我々が見ているものは、盲目的に狂った憎しみでの排他主義と民族主義がドイツにおいてますます広がっていることであり、我々の民主主義を危険にしていることである。外国人が打たれたとき、今日黙って見る人は、明日はどのように書籍を燃やされるか、明後日はどのように市民のそのグループが殺害されるのかを見なければならないことになろう。ドイツは“外国人への敵国ではない”という主張はむき出しの厚かましさである。

ドイツエスペラント協会はそうしたわけで要求する：

★人間の身体・生命への攻撃に対する効果的防護を、また警察官の気力ある行動と、執拗な暴力者に対する司法；

★全ての水準での社会、政治間の広い対話を、すでに生じた他人性を克服し、その持つ原因の配慮で現実問題のために万が一の解決を探るために；

★政治右翼のテロに対する“連帯性の網”における全ての民主主義者の連帯的行動的弁護を、それによって今までよりさらに我が共和国が持つ我々の同一性の基盤に民主主義、自由、そして人権を作り出そう、こうして民族主義の原則を弱めながら。自分をドイツ人と名乗る人は４０年来我々が誇るべきかも知れない価値のために積極的に弁護すべきである。我々の価値を踏み付ける全ての人達は自分を我々社会の反対側に置き憲法で正当な国家における先見可能な当然の結果を担うべきである。

我が同胞と全世界の我が友人に言う：

これを我々は許容しない！　そうした下劣な行為を許すことは出来ない。我々は我が会員と全てのエスペラントの友人に訴える、今まで以上さらに市民的勇気を持って、罪なく脅される人達の防護のために行動しよう。

En Mainz, 1992, 10, 04　ドイツエスペラント協会幹事会

IF 1993、1　から須藤訳

小樽のＰＩＯＮＩＲＯ　萩原謙造について

HAGIHARA Kenzoo, nia Pioniro en Otaru

Acuŝi HOŜIDA (Tomakomai)

Ankoraŭ restas 'blankaj makuloj' en pratempa Esperanto-movado. En Otaru, la urbo de Hokkajda Esperanto-Kongreso en 1993, okazis la unua kurso de nia lingvo en 1920. Tamen, pri ties organizanto, HAGIHARA Kenzoo, oni temis preskaŭ neniam en Hokkajdo. Per arkivoj kaj atestoj de liaj jam malmultaj konatoj, mi volas prezenti al vi skizeton de nia pioniro antaŭ sepdek jaroj — brile talenta knabo de JEA kaj JEI en dekaj jaroj, poste mortinta kiel viktimo de nehumana subpremo de Tokkoo, la politika polico de Japana Imperio.

今年の北海道大会は小樽で開かれる。この街は札幌より早く「蝦夷地」の時代からひらけ、北海道経済の中心だった時代もあった。「斜陽の街」と言われたこともあるが、歴史を見直そうとする機運に恵まれて人気ある観光都市に変身。また北の隣国ロシアとの交流が増え、ロシア語のテレホンサービスも行われるほどになっている。

エスペラント運動の歴史も古く、1919年の北大エスペラント会結成に続く1920年には小樽で最初の講習会が開かれたと「北海道エスペラント運動史」（相沢治雄編）に記されている。そこに名が出ていないその講習の指導者が、lerta esp-ista knabo といわれた萩原謙造だった。

千九百十年代後半、国内の運動は最初の谷底を過ぎて上り坂に向かう。この興隆期の特徴は少年学習者の増加だった。後ＵＥＡ会長になった八木日出雄、伊東三郎の名で知られる磯崎（のち宮崎）巌、そしてこの萩原謙造も皆この時期、中学生で学習を始めている。

当時のＪＥＡ（日本エスペラント協会）の1919年１１月２２日の決定に次の記録がある。

「――なお松崎克己（府立４中生徒）、萩原謙造（京華商業生徒）の２名を協会幹事に――初めて中学校生徒の幹事ができた」（日本エスペラント運動資料Ⅰ、1906 - 1926 より）

しかし萩原の協会幹事としての仕事はほとんどなかったと思われる。このひと月後の１２月２０日の臨時総会で、協会は日本エスペラント大会の主催者として名のみを残し、事業機関としては別に「日本エスペラント学会」（ＪＥＩ）を設立するという、運動組織の革命が起こったからである。

翌1920年、彼は東京から小樽へ移る。この年から発刊されたＪＥＩ機関誌 La Revuo Orienta (以下ＲＯ）の５月号に、「学会委員萩原謙造氏は京華商業学校を卒業し小樽高商へ入学せられた」の記事がある。元ＪＥＡ会員は自動的にＪＥＩ会員に切り替えられた。

８月号には小樽での活動開始を予告する記事が出ている。"—En aŭtuno oni komencos viglan movadon sub la pionirado de S-ro Hagihara, lerta esperantist-knabo,—" この少し前の５月札幌で始まった講習は申込み者１８６名の盛況だった（講師は三田智大）。こちらでもやるぞ、という気持ちが見えるようだ。

その９月の活動については「小樽高商へ入学の元協会幹事萩原、留萌より転住の高桑が９月１６日より組合教会で講習（３０人）、三井物産三友クラブにて講習（３０人）」と、日本エスペラン

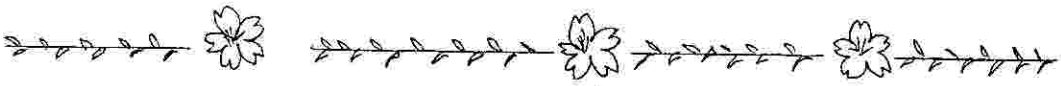
ト運動資料Ⅰに出ている。

1921年１１月のＲＯの Lokaj Grupoj のなかに小樽Ｅｓｐ会の名が出ており、1922年１月号ではその adreso は（小樽区小樽高等商業学校第二寄宿舎　萩原謙造）になっていた。同年６月号には、「――４月小樽高商で講習、学生２３、教授１名参加、指導は萩原。なお学内の外国語劇にエスペラントのものを発表――」との報告がある。

翌1923年、小樽 Esp会は代表を萩原から岩重祐（小樽高商内）に変更。卒業のためだろうが、以後彼の名は Esp-ujoから消えた。－と思っていたところ、最近偶然彼のその後の資料が提供された。

1984年に出た「レジスタンスの青春」中の吹田市の宝木武則氏の文「武則のエスペラントと左翼思想との初出会いが萩原先生だった。先生は小樽高商時代、小林多喜二と同級生、1938年２月人民戦線教授グループ事件で検挙された――」が気になり問い合わせたら「あれは誤植で萩原先生です」と、萩原謙造のその後を知らせてきた。

小樽高商卒業後更に東京高商（現一ツ橋商大）を出て1926年巣鴨学園商業部教諭となり宝木を教える。1928年巣鴨高商（現千葉商大）教授。1938年検挙、拘置所で健康を害し出所後1940年末死去。多喜二の方が高商入学は１年遅く、「同級生」は疑問だが、知り合っていた可能性はある。宝木武則氏は現在「反核産業人の会」世話人として活躍。五木寛之の「青春の門」のモデルだが、かって長谷川テルの日本脱出に手を貸した事もある。



●エスペラント学ぼう

札幌エスペラント普及会は、五月八日から始めるエスペラント入門講習会の受講者を募っている。会場は同市職員会館（中央区大通西一九）。毎土曜午後一時半から二時間行う。受講料は無料だが、教材費が六千円ほどかかる。期間は約四カ月。申し込みは同普及会の責任者・宮岸さん☎０１１・５８２・３１２２へ。

《エスペラント講習会へのお誘い》

札幌エスペラント会のエスペラント入門講習会が５月８日から始まります。５月１５日は合宿と重なるため，５月８日に説明を行ない実際の勉強は５月２２日から始まる見込です。皆さんの身近にエスペラントを学んでみたいという方がいますなら，ぜひお勧め願います。

（阿部映子 Eiko Abe）

アイヌ新法試訳（2）：苫小牧グループの訳。（案）第1ページの終わり近くから「本法を制定する理由」の終わりまで。御意見、提案を歓迎します。

PROPONO POR LA LEĜO PRI LA AINA NACIO（2）

現在行われているいわゆる北海道ウタリ対策の実態は現行諸法諸制度の寄せ集めに過ぎず、整合性* を欠くばかりでなく、何よりもアイヌ民族に対する国としての責任があいまいにされている。

いま求められているのは、アイヌの民族的権利の回復を前提にした人種的差別の一掃、民族教育と文化の振興、経済自立対策など、抜本的かつ総合的な制度を確立することである。

アイヌ民族問題は、日本の近代国家への成立過程においてひきおこされた恥ずべき歴史的所産であり、日本国憲法によって保証された基本的人権にかかわる重要な課題をはらんでいる。

このような事態を解決することは政府の責任であり、全国民的な課題であることの認識から、ここに屈辱的なアイヌ民族差別法である北海道旧土人保護法を廃止し、新たにアイヌ民族に関する法律を制定するものである。

この法律は国内に在住するすべてのアイヌ民族を対象とする。

La tielnomata politiko nun plenumata "Por la Bono de Utari(ainoj) en Hokkajdo" estas nura kolekto de diversaj rimedoj de ekzistantaj leĝoj kaj instancoj. Mankas al ĝi ne nur akordo* , sed antaŭ ĉio, klara respondeco de la registaro por aina nacio.

Nun postulataj estas la establo de radikala kaj ĝenerala sistemo por neniigi etnan diskriminacion, evoluigi etnan edukadon kaj etnan kulturon, kaj la politiko por ekonomia sendependiĝo k.a., sur la bazo de regajno de etnaj rajtoj de ainoj.

La problemo de aina nacio estas hontinda historia rezulto okazinta sur la vojo al moderna Japana Ŝtato. Kaj ĝi enhavas gravajn taskojn rilate al la fundamentaj homaj rajtoj garantiataj en la Konstitucio de Japanio.

Kun la konvinko, ke solvi tiun problemon estas respondeco de la registaro kaj samtempe la tasko de tuta japana popolo, ni abolas la Leĝon Protekti Eks-indiĝenojn en Hokkajdo, kiu estas nenio alia ol humiliga diskriminacia leĝo kontraŭ aina popolo. Kaj ansatatu ĝi ni fondas novan Leĝon pri la Aina Nacio.

Tiu leĝo estas por ĉiu aino vivanta en Japanio.

エロシェンコ「枯葉物語」より

El Rakontoj de Velkinta Folio de Eroŝenko

切替英雄 Kirikae-Hideo

この読み物は私が鳥取大学在任中に書いたものである。鳥取大学では職員の間で年1回の文芸雑誌が出されている。読者も職員に限られている。誌名は『葦』という。着任したばかりのころ、新任ということで投稿を求められた。参考のため『葦』のバックナンバーをめくった。たまたま医学部の小倉道雄教授が重訳された「誕生日　ケロイドの女」に目が止った。小倉先生は未知の人だった。エスペラントへの希望を失わずに鳥取で2年半をすごすことができたのは、この小さな戯曲のお陰である。そして、『葦』のため何かエスペラントについて書こうという気になったのも、この作品を読んだために他ならない。

このたび小倉先生の翻訳された Naskiĝtago: Virino kun Keloido が東京の国際文化工房から出版された。これを記念し、私はかつて自分が『葦』２５号（1990年）に投稿したものをひそかに読み返し、家族以外に知り合いのなかった1989年秋のわびしい鳥取を思い出した。また、お送りした原稿を読まれて、米子の医学部から鳥取の私の研究室までおいで下さった小倉先生のことを思い出した。そしてこの読み物を是非ヘロルドに転載していただきたいと思った。

転載にあたり、女優であり、また札幌の酒房「きらく」のおかみでもある菅原澄子氏に表現の細部を直していただいた。

Tiu ĉi legaĵo estis skribita, kiam mi laboris en Universitato de Tottori. En la universitato la oficistoj kaj profesoroj eldonas literaturan gazeton ĉiujare. La titolo estas "Asi"(kano). Legantoj de "Asi" limiĝas en la universitatanoj. Tuj post la ekpreno de posteno en la universitato, mi estis petita kontribui por la gazeto, ĉar mi estis novulo. Mi rapidlegis malnovajn numerojn de la gazeto por scii, kiaj legaĵoj estis preferitaj. Hazarde miaj okuloj haltis ĉe la dramo "Naskiĝtago: Virino kun Keloido". Ĝi estis tradukita el Esperanto al la japana lingvo de Ogura-Miĉio, profesoro de Medicina Fakultato. Dank'al tiu dramo, mi travivis 2 kaj duonon da jaroj en Tottori sen ĵeti esperon pri Esperanto. Kaj, ĉar mi legis ĝin, mi decidis, ke mi mem ankaŭ kontribuu por "Asi" per ia afero de la esperanta literaturo.

Lastatempe, la dramo estis reaperigita en Esperanto de Internacia Kultura Laborejo (Tokio). Por festi tion sola, mi kaŝe elmetis el ŝranko mian kontribuaĵon al "Asi"(n-ro 25) kaj relegis ĝin. Kaj mi rememoris je 3 jaroj antauan aŭtunon de soleca Tottori, kie mi ekloĝis kun miaj 3 familianoj tiam, kaj kie neniu estis intima krom ili ankoraŭ. Kaj mi rememoris d-ron Ogura, kiu venis de Yonago, kie Medicina Fakultato estas, kaj vizitis mian oficejon en Tottori leginte mian manskribaĵon de la kontribuaĵo. Kaj mi esperis, ke ĉi tiu legaĵo reaperu en nia Heroldo por memoro de lia multe valora eldono.

Okaze de la nuna reapero, f-ino Sugawara-Sumiko, aktorino kaj mastrino de la trinkejo "Kiraku" en Sapporo bonkore plibonigis kelkajn nebonajn esprimojn.

「枯葉物語」より　エスペラント文学の一例

『葦』二一号（昭和六一年）にて医学部の小倉道雄先生が翻訳・紹介された戯曲を読み深く感動した。また小倉先生は戯曲が書かれたいきさつ、『葦』に発表された経緯を正確に述べておられるが、これも一篇の青春記となっており、非常な興味を覚えるものであった。小倉先生の紹介された戯曲は、日本語からエスペラントへ翻訳され、さらにそこから再び日本語へ翻訳されたものである。日本語によるオリジナルの原稿は失われている。小倉先生のお仕事はエスペラント文学活動の一例といえる。

本稿で私もエスペラント文学活動を行いたい。ここで私はオリジナルがエスペラントの作品を日本語に翻訳する。著者はウクライナ人のワシリー・エロシェンコである。テキストは次のものから採った。表題は「枯葉物語」と訳せよう。

V. Eroŝenko. Rakontoj de Velkinta Folio.

大阪　日本エスペラント書共同組合（発行人宮本政男）　１９５３年

「枯葉物語」は、もともと１９２３年に上海で出版された La Ĝemo de unu Soleca Animo「孤独なる魂の嘆き」に含まれていたものであるという。エロシェンコのこの有名な著書を私はまだ見ていない。

エロシェンコについて私の知るところは、魯迅の短編「あひるの喜劇」にロシアの盲目の詩人として登場するという程度である。いま宮本氏が校訂・出版された本に見られる「著者紹介」をそのまま引用する。

> １９８９年ロシヤ、クラスカヤに生まれる。幼児より盲目となりモスクワ盲学校に学ぶ。１９１４年イギリスへエスペラント旅行数カ月。１９１４年日本へ来り、シヤム、インド旅行の後、日本にてエスペラント運動、文学運動に参加。１９２１年日本追放、北京に到り、魯迅らと共にエスペラント会創立。数年を中国に送りソヴエート同盟へ帰国、其後消息を絶つ。

著書　『孤独なる魂の嘆き』（本書はその１篇）の外、エスペラント及び日本語による著書あり。　なお、高杉一郎という方がエロシェンコについて深く研究されておられるとのことであるが、私はまだ見ていない。

「枯葉物語」は序文と六つの物語から成っている。上海と思われる大都会の街路に大きな老木が立ってる。六つの物語はどれも、この木の下にたたずむかわいそうな人々を描いたものである。エロシェンコは序文の最後で次のように述べている。

> ここにほんのわずかの枯葉物語を紹介します。もしこれらの物語が読者の頭に良き思いを抱かしめるならば、もし読者の心に気高い感情を呼び起こすならば、枯葉は無駄に一生を終えたことになりません。そして著者の目的も達せられたことになります。

以下に紹介するのはこれらの物語の一つである。私にとって翻訳という仕事は初めてのことである。のみならず、ロシアやウクライナの文学の伝統も知らない。エスペラン

ト文学の常識もわきまえていない。エロシェンコ自身について知るところもほとんどない。このような無知な人間のつたない訳では高貴なエロシェンコの魂を伝えることはできないと思う。

小さな少女の秘密

春のことでした。年老いた木の緑の葉が愛と喜びにふるえていました。何もかもがうれしそうにほほえんでいました。青い空、盛んに照りつける太陽、幸せを求めて果てしない空を漂う不思議な雲の切れはし。ある日、小さな少女がその年老いた木の下にやって来ました。少女は九歳でした。彼女もまたほほえんでいました。愛と喜びにふるえていました。目は密やかな希望に輝いていました。

少女は言いました。「緑の葉の親切な木のお爺さん、人は誰でも死ぬというのは本当ですか。私のお兄さんも、もう死ぬことになるのですか。そんなことないですね。だって、まだ十二歳なのですから。人は死ぬものといって、ただそれだけで十二歳の子供がみんな死ぬことにはなりませんね。緑の葉の親切な木のお爺さん、私は兄さんのほか誰も愛しておりません。兄さんのほかに愛してあげられる人がいないのです。父さんのお葬式をするために一番上の姉さんが売られていきました。母さんのお葬式をするために二番目の姉さんが売られていきました。今度は私が売られていきます。兄さんの病気の治療に偉いお医者さんを呼ばなければならないからです。だけど、兄さんは絶対にいやというでしょう。緑の葉の親切な木のお爺さん、親戚の小父さん達は女の子を売っています。いったいどんな人が何のために買うのでしょう。兄さんが言うには、姉さんたちは夜のために売られていったそうです。本当でしょうか。ときどき女の子を売る市場に行ってみたくなります。でもどこにあるのか誰も教えてくれません・・・・緑の葉の親切な木のお爺さん、咳をして血を吐くのはそんなに恐い病気なのですか。小父さん小母さんは兄さんを部屋から出したらだめだと言います。友達と遊ぶのも、勉強するのも、本を読むのも、長く話すのもいけないと言います。寝台で静かに寝ているか、窓のそばの大きな椅子にもたれているほかはだめなのです。なんてかわいそうなことでしょう。窓から見えるのは汚い煉瓦の壁だけなのです。緑の葉の親切な木のお爺さん、みんなは何のために高くて汚い壁をいたるところに巡らすのでしょう。自由な世界や春の着物で着飾った木が見えないようにするためでしょうか。

「緑の葉の親切な木のお爺さん、私はもう兄さんと一緒に座っていてもいけないのです。兄さんの膝にもたれ掛かってもいけないのです。一緒に遊んでもいけないのです。小父さん達は私が大きくなったからだと言います。だけど兄さんと離れてどうして生きていけましょう。私は兄さんだけを愛しています。兄さんも私を愛しています。私達はふたりとも小父さん達が好きではありません。父さんのお葬式のために一番上の姉さんを売って、母さんのお葬式のために二番目の姉さんを売った人たちですから・・・・

「緑の葉の親切な木のお爺さん、あなたは私の一番の秘密を決して小父さん達に言いませんね。あなたは春のそよ風にも、ちぎれ雲にも言いませんね。

「夜になって、みんなが寝てしまうと、私は兄さんの部屋に忍び込みます。そのとき何もかも忘れてしまうほど幸せでいっぱいになります。私は兄さんと一緒に寝台に寝ます。兄さんは私を抱いてくれます。私はその腕の中で寝ます。兄さんは私を優しくなぜ

てくれます。私も兄さんの顔にキスをします。兄さんの顔は青白く、頬っぺたには不思議な染みができています・・・・

「緑の葉の親切な木のお爺さん、私はそうしているとき、とても幸せな気持ちになります。私達はいろいろな話をします。高い空にいらっしゃる神様のこと、美しい天使たちのこと、星の間を飛んでいる父さん母さんのこと、海に漂っている怪物のこと、山を行ったり来たりしている恐ろしい魔物のこと、ずる賢い狐のこと、森に隠れている恐い狼のこと、私達の町に住んでいる白人のこと。

「布団の中に潜って、明りをつけ、いろいろなことをして遊んだり、白人の子供の絵本を見てため息をついたりすることもあります。疲れると私は兄さんの腕の中で静かに眠ります。そして目覚し時計が起こしてくれるときまで眠り続けるのです。

「時計は私達の親切な友達です。小父さん達が私達に気づかないような時間を教えてくれるからです。私はこっそり外に出て自分の部屋に戻ります。そしてみんなが目を覚ます時を待つのです・・・・

「緑の葉の親切な木のお爺さん、私には血を吐くことがそんなに恐いことだとは信じられません。あなたは小父さん達に私の秘密を決して言いませんね。春のそよ風にも、ちぎれ雲にも言いませんね・・・・

「緑の葉の親切な木のお爺さん、私もまた血を吐きました。でもこのことは誰も知りません。私は人のいないところで咳をし、血の混じった痰を見えないところに隠します。隠せないときは飲み込んでしまいます。だけどご覧なさい。私はどこへでも出かけて行って友達と遊んでいます。そしてとっても元気です。でも兄さんは、ただ寝台に寝るか窓のそばに座っていなければならないのです、高くて汚い煉瓦の壁を見ながら。

「緑の葉の親切な木のお爺さん、いったい何のために汚い煉瓦の壁が必要なのでしょう・・・・

「だけど一番困るのは、兄さんが毎日とても嫌な飲物を飲まなければならないことです。

「緑の葉の親切な木のお爺さん、苦い薬で肺の病気がよくなるなんて信じられますか。小父さん達は直ると言います。でも兄さんは信じていません。兄さんはいつも涙を流しながら飲んでいました。だけど今ではもう飲んでいません。私がその代わりに飲んでいます。毎晩寝台に入って二人でかるたをします。兄さんは、負けたほうが薬を飲むことに決めました。兄さんはとても頭がいいのでいつも勝ちます。それで私が兄さんの代わりに飲まなくてはなりません。兄さんはいつも愉快そうに笑います・・・・

「小父さん達は何も気づいていません。兄さんはそれほど賢く注意深いのです。小父さん達でさえ、しょっちゅう兄さんの頭の良さに感心しています・・・・

「緑の葉の親切な木のお爺さん、あまり頭のよい子は長く生きられないというのは本当でしょうか。私は信じません。あなたは信じますか。馬鹿な人だけが長生きできるというのでしょうか。それはあまりにも恐ろしいことです。お爺いさんお婆さんは九十まで生きました。いくらかは頭が良かったそうです。それではいったい小父さん達は何歳まで生きるのでしょう。頭がいいとは誰も言いません・・・・

「緑の葉の親切な木のお爺さん、あなたの葉っぱを何枚か分けて下さい。病気の兄さんのために緑の冠を作りたいのです・・・・」

少女は手を伸ばしました。

緑の木の葉は小さく叫びました。「木のお爺さん、私達はこの人間の子供の言うことを信じていいのでしょうか。」木は黙っています。木は何も答えようとしません。木の葉たちは戸惑いました。木の葉の多くは、こうささやいています。「私達は誰も信じません。ふるさとの木の枝から離れて、遠くへ行くのはいやです。木のお爺さんから離れるのはいやです。」

数本の枝だけが地面に垂れ下がりました。わずかに数枚の木の葉が落ちました。少女は喜んでそれを集め、緑の冠を編みました。そして歌いながら家に帰って行きました。家では青白い顔色をした、頬に不思議な染みのついた兄が少女を待っています。彼はもう死んでいます。

木は黙っています。木は緑の冠が死人の頭を飾ったことを話そうとしません。木は小さな少女が兄の葬式のために売られて行ったことを話そうとしません。木は黙っています。何も話しません。

何もかもがうれしそうにほほえんでいました。青い空、盛んに照りつける太陽、幸せを求めて果てしない空を漂う不思議な雲の切れはし・・・・

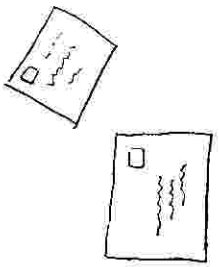
カワハラ・カズヤへ手紙を！

私は昨日，本紙前編集者であるカワハラ・カズヤ(平間一弥)から手紙をいただきました。

肺の病気が再発し，かなり危険な状態のようですが，精神的には平静で落ち着いている様子が読み取れました。「手紙が特効薬」とも書いていますので，皆さん沢山手紙を送りましょう。　切替英雄 Kirikae-Hideo

Sendu leterojn al s-ano Kauahara!

Mi estis anoncita de malnova amiko, Kauahara-Kazuja, mem hierau, ke lia pulmo malbonigis kaj li falis en dangeran staton. Tamen mi trovis, ke lia animo estis sana kaj trankvila de inter linioj de la letero. Li deziris leterojn de liaj iamaj kunlaborantoj. Tuj sendu al li leteroj por kuragigi lin.



この後切替氏は，入間での全国合宿にむかう途中に仙台市に立ち寄り，カワハラ・カズヤ(平間一弥)氏の入院先にお見舞いに行きました。カワハラ氏の手術後の経過は良好で，次頁の原稿を送ってくれました。「Averto」のような冗談もあります。５月２０日頃までは入院しているので，はがきで一言でも手紙を出しましょう。

９８０　仙台市青葉区星陵町４－１
東北大抗酸菌病研究所
付属病院５１６号室
カワハラ・カズヤ
（または平間一弥）

IOM PRI MIA "RAPORTO"

KAWAHARA H. Kazuya

Post la apero de mia "raporto" pri la lastajara Tutlanda Kunloĝado en Iruma, Saitama (N-ro 42, aprilo-majo 1992) venis al mi reagoj de kelkaj legantoj. Nur kelkaj. Sed konfesdire, mi malfacile kredis la neatenditajn reagojn. Mi demandis min, ĉu tio ne signifas ke sendube ekzistas legantoj vere legantaj Esperantajn paĝojn en nia Heroldo.

Kia nekredebla fenomeno! Nenio malhelpis al mi verŝi larmojn de ĝojo de la tiama redaktanto de la gazeto, kiam mi ricevis la unuan eĥaleteron de leganto. Kaj tiam, ĝuste tiam mian koron emocie trafluis la karmemora melodio kantita de Yamaguti Momoe;

Ah, en iu urbo, en vilaĝ'
certe iu kun vortar'
nun tralegas ĝin
La teda paĝ' de Esperant',
mi ŝercas vante de petola kor'
Kaj akompanu parodi',
kiun faris vi mem legant'.

Historia evento! Ja rompiĝis la tradicia paroldiro, herede kaj sekrete transdirita en la redakcio: Esperantajn paĝojn legas neniu.

Antaŭ miaj okuloj subite eketendiĝis verda maro kaj en la ĉielo ekbrilis stelo de l' Espero, kiu promesas kantantan morgaŭon al nia idealo. Lasante larmojn kurantaj sur la vangoj, mi sola stariĝis kaj mallaŭte kantetis la himnon;

Malfermu la paĝojn,
ho vi legantar'
pro vana, pro alta kotizo!
Ĝi donu kompense jen
distrojn al vi,
aplombe ronkanta dormanto....

Pardonu. Ankoraŭ mi profunde dronas en la komforta ekscitiĝo. Mi do ne bone povas min remeti en racian mondon.

Nu, mi prezentas la reagojn koncize, por montri al ili dankemon anstataŭ la redakcio.

Iu el Kawahara-tyô 35-23, Syôgo-in, Sakyô-ku, 606 Kioto skribis:

"Via amrakonto tre plaĉas al mi kaj mi estas scivolema pri la sekvo de ŝi kaj vi".

Ŝajnis ke ŝi mislegis la "raporton" por "amrakonto". Kio kaŭzis al ŝi tian miskomprenon, mi neniel estas certa. Sed, ŝia sana scivolemo estos kontentigita en Herold, dank' al la sperta redaktoro, kiu iam malavare disponigos paĝojn al mi por la "sekvo".

Iu el Sapporo unulinie demandis.

"Ĉu tiuj hazardoj okazis senintence?" Mi unulinie respondis.

"Jes, la hazardaj hazardoj pure hazarde hazardis."

Mia tomakomaja amiko skribis, ke la liaopinie fikcia raporto sufiĉe distris lin. Lia letero atestis, ke li tute ne komprenas min. Mi ne estas tiel malserioza, kiel li opinias. Kiel miaj konatoj bone scias, mi estas ŝafkora malaŭdaculo. Jen kial mi ne kuraĝas fari falsan raporton en la oficiala organo de la Ligo, antaŭ ĉio miaj gepatroj donis al mi nenian talenton verki fikcion, bedaŭrinde. Vero ja estas mia intima amiko kaj mi malamas falson.

Dume, mi ne povis fuĝi de duŝo da riproĉo de estimata veterano. Li sendis fotokopion de la paĝoj, en kiu li ruĝinke menciis huzimonton da fuŝaĵoj gramatikaj, frazstilaj, vortelektaj, tajpteknikaj k.a. en la raporto. Li admonis min pro mia maldiligentego kaj severe konsilis min altigi ĝeneralan nivelon de mia lingva tekniko per atenta studado de verkoj de Hans Jasik kaj Anne Ivarson.

Mi respondis la maljunan amikon.

"Estimata D-ro Akademiano, mi elkore dankas vin pro via letero k la klerigaj konsiloj. Tiuj amikaj

mencioj trapafis mian koron. (....) Mi promesas al vi, ke mia verko nepre boniĝos, kiam oni ĝin alprenos al venonta Krestomatio. (....)"

Alia kazo. En la matusima kongreso junulino el Okayama, vidinte min, unuvorte, "Mensogulo!".

Restas por mi la plej grava.

La purhazarderenkontitulino rave silentis kun kutima rideto sorĉega. Minutoj pasis. Ŝi respondis per... dolĉa kiseto al la lipoj. ★

VANA DUOBLECO

HIRAMA Kazuya

Komence de ĉi jaro mi ricevis leteron el Hispanio kun deziro scii la prezon kaj pagmanieron por aboni "Heroldo"-n, se tio eblas. Ĝuste temas pri nia Heroldo de HEL.

Mi donis al li necesajn informojn, skribinte, ke ĝi tamen povas esti aspekta nacilingve, por ke li ne havu tro da intereso. Alipoŝte mi sendis specimenon al li (N-ro 42 apr.-okt. '92. Mi ricevis tri ekzemplerojn de la strange nombrita numero).

Li respondis resume jene: Certe ĝi estas nacilingva, kio estas bedaŭrinda afero por E-gazeto. Pro tio li ne klopodos ĝin aboni.

Mi tamen estas konvinkita, ke iusence tiu nacilingveco necesas por nia movado. Mia problemkonscio kuŝas aliloke.

En la lastaj tri numeroj mi vidas certan kvanton da E-artikolo. Sed strange, ili estas metitaj kiel aldonaĵoj de nacilingvaĵoj. Por kio, por kiu la red. tiel servemas? Vana duobleco! Sufiĉas unu, ĉu japane, ĉu E-e. Ŝparu paperon!

Kiu anticipe legis la japanan, malofte legos la alian. Ĉu nia red. kuraĝas nei tiun "malsanon"? ★

AVERTO

En sia artikolo "IOM PRÌ MIA 'RAPORTO'" en ĉi tiu numero s-ro KAWAHARA H. K. faris nepermeseblan provokon, kiu ne nur ofendas legantaron de Heroldo de HEL kaj la redakcion, sed ankaŭ difektas la prestiĝon de nia Ligo kaj de ĝenerala Esperanto-Movado.

Pri la malbonintenca esprimo en lia artikolo la red. anticipe petis kun sufiĉe kamarada dececo al li reskribi aŭ ŝanĝi esprimon por eviti miskomprenon de legantoj. Sed li, sendube kun kaŝita motivo, obstine rifuzis nian racian proponon, pretekstante la liberon de esprimo, eĉ insultis la redakcion per abomeninda vorto precipe por redaktantoj, "cenzuremulo". Kvankam ni tenis nin ĉiam esti ĝentilaj kaj paciencaj kaj volis solvi la problemon pace, la afero ne iris glate.

Finfine la red. estis devigita atingi konkludon, ke por montri al la kanajlo kaj nia legantaro nian malcenzuremon ni kontraŭvole aperigu la tutan tekston senŝanĝe, eĉ kun liaj kutimaj lingvaj fuŝaĵoj.

Ni ĉi tie dekralas al karaj legantoj. En la redakcio ne ekzistas tia antaŭjuĝo, kia li diraĉas, "Esperantajn paĝojn legas neniu". Ekzistas nur legendo "Apenaŭ kelkaj legas esperantajn paĝojn".

Kaj ni proklamas, ke ni neniam lasos ĉian ajn kalumnion kaj provokon al ni kaj Ligo. Ĉian ajn demagogion ni frakasos kun nenia deteno kaj kompato. Kaj pri ĉio, kio estos kaŭzita de ĉi tiu afero, respondecos la provokanto mem. Provokanto ne havas estontecon, tiun atendas nur infero.

Aĉulo, restu kun lavita kolo!
Verdan martelon sur provokanton!

La 1-an de aprilo

La Redakcio

——— ekstertempa aprilŝerco —

Aĉulo, restu kun lavita kolo!
Verdan martelon sur provokanton!

La 1-an de aprilo

La Redakcio

——————ekstertempa aprilŝerco—

Aĉulo, restu kun lavita kolo!
Verdan martelon sur provokanton!

La 1-an de aprilo

La Redakcio

——————ekstertempa aprilŝerco—

会費納入のお願い

Bonvolu pagi kotizon!

会計係 馬場 恵美子

会費のお支払いはもうお済みですか?
会費は購読会員・会員共に2,000円です。(家族会員1,000円) 支払方法としては郵便振替(番号等は後記)・現金書留・道大会等の持ち込み等があげられます。払込時期などにより判断しかねる場合もありますので内容を明記願います。また領収証は申し出があれば発行致します。その際近況報告などを添えていただければ機関誌に掲載したいと思います。
会員になることで機関誌の購読、毎年行われる大会・合宿の案内、通信講座による添削指導などのサービスを受けることが出来ます。そこであなたの現在の会費状況を機関誌の宛名に表示しました。(5月1日現在)

〒1215
北海道希望市夜明け
道産子 らざろ
様
道E連盟 ★★★

の内容は

① 道E連盟 1992-1993(会費期限)
② 道E連盟 ☆☆☆ (入会をお薦めします)
③ 道E連盟 ★★★ (会費が切れています)
④ 道E連盟 寄贈 (エスペラント会、マスコミ他)

郵便振替口座
小樽 0—17075
北海道エスペラント連盟

会計担当者住所
〒001札幌市北区新琴似7条8丁目5番34号
馬場 恵美子 電(011)761-8060(夜9時以降)

Novaĵo ☆★☆ 近況報告 ☆★☆

3月31日—4月5日 大阪エスペラント会主催の「上海・蘇州・中国の旅」に参加しました。北海道からは山口紀代美さんが参加。その報告は関東エスペラント会機関誌PONTETO5月号に掲載されますのでぜひ御期待!
(静岡県 大原 たかし)

Antaŭ 18 monatoj mi transloĝiĝis ol ĉi tie de Tokio. Post hodiaŭ どうぞヨロシク。Mi estas 60 jara pensiulo.
(女満別町 小川 己久雄)

しばらくエスペラントの学習はお休みしていますが、また皆さんと一緒に活動できる日を楽しみにしています。(札幌市 砂野 裕子)

☆★☆ 住所が変わりました ☆★☆
*樺山 裕介 (苫小牧市山手町)
*濱田 國貞 (岩見沢市鳩が丘)

☆★☆ 転居先不明 どなたかご連絡を! ☆★☆
*金井 照雄 *田雁 豊 *山下 博子

Heroldo de HEL
第46号(1993. 5. 4)
北海道エスペラント連盟機関紙
編集部
〒001 札幌市北区北12西1パークMS602
阿部映子気付 ☎011-756-2291
郵便振替口座 小樽0—17075
北海道エスペラント連盟